

中古語の動詞語彙に対する アスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報のアノテーションの試み

加藤 咲子 (筑波大学大学院)

An Attempt to Annotate the Aspectual and Voice Features of Verbs in Early Middle Japanese

Sakiko Kato (University of Tsukuba)

要旨

本発表では、中古語の動詞と「アスペクトおよびヴォイスにかかわるカテゴリカルな語彙的意味」(石井 2007:37) とを対応づける試みについて報告する。古典日本語の動詞に関して文法的な観点からのアノテーションは大規模には行われていない。そこで、まず、中古語の動詞に対応づける文法的な情報として、石井 (2007) 『現代日本語の複合語形成論』による分類を採用したことを述べる。これは、現代日本語の複合動詞を構成する造語成分をアスペクト的側面 (動作/変化) とヴォイス的側面 (主体/客体) のくみあわせから 6 種類に分類するものである。次に、方法として、「中古和文 UniDic」による解析にもとづく、『日本語歴史コーパス』「平安時代編」において品詞が動詞である語 (語彙素) を対象に、アスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報のアノテーションを行ったことについて説明する。最後に、データ構築の進捗状況を報告し、中古語の動詞の様相に関する分析事例を示す。

1. はじめに

本稿では、中古語の動詞に対して、主体/客体の動作/変化や自他といった「アスペクトおよびヴォイスにかかわるカテゴリカルな語彙的意味」(石井 2007:37) の情報を対応づける試みについて述べる。古典日本語に関しては、品詞や語種などの情報 (いわゆる「形態論情報」) の付与や意味的な観点からのアノテーションは行われているが、文法的な観点からのアノテーション、特に動詞の自他や語彙的アスペクトに関する情報のアノテーションの取り組みは十分に行われているとは言い難い。そこで、本研究では、古典日本語、特に中古語の動詞に対して、文法的な観点からの分類情報を対応づけたデータを構築し、中古語の動詞やアスペクトに関する研究に資する言語資源を作成することを目的とする。

2. 先行研究

2.1 古典日本語動詞に関するアノテーション

古典日本語に関する語彙的な情報のアノテーションの例として、国立国語研究所 (2025) 『日本語歴史コーパス』における形態論情報の付与と、宮島・鈴木・石井・安部 (2014) 『日本古典対照分類語彙表』における『分類語彙表』(増補改訂版、国立国語研究所 (編) 2004) の意味分類との対応づけとが挙げられる。前者は、奈良/平安/鎌倉/室町/江戸/明治・大正の各時代の言語資料を対象に、対応する解析用辞書の「UniDic」によりテキストを形態素解析し、読みや品詞、語種等の形態論情報を付与したもので、オンラインのコーパス検索アプリケーション「中納言」を通して利用することで、各時代の各言語資料の総索引の代わりになるだけでなく、より高度な検索や集計も行うことができる。後者は、奈良時代の『万葉集』から鎌倉時代の『徒然草』までの古典文学作品 17 作品を対象に、使われている自立語の単語とその頻度をまとめたうえで、各単語に『分類語彙表』の分類番号を記したものであり、形態論情報だけでなく、各単語が人間活動に関するものか自然に関するものか、ある

いは人間や自然のあり方のわく組みに関するものかといった意味的範疇・意味分野の区分や、どのような単語がその単語と同義類義の関係にあるかといった情報も参照することが可能である。

しかし、上に挙げた2例はどちらも古典日本語全般に対するもので、特定の時代や特定の品詞のみに関するものではない。特に、品詞について言えば、どちらの例においても各語の品詞や活用型は示されているが、各語がその品詞の中でどのような性質をもつかといった文法的観点に関する情報は示されていない²。

2.2 動詞のアスペクトおよびヴォイスにかかわる分類—石井（2007）

本研究の動詞分類では、現代日本語の複合動詞の形成について論じた石井（2007）の分類を参照する。石井（2007）は、「動詞+動詞」型の複合動詞が形成されるしくみを説明し得る基本的かつ一般的なモデルの作成を目指し、奥田（1977・1978a・1978b）による、他動詞と自動詞との対立を主体の《動作》と《変化》との対立として捉え、他動詞は主体との関係では《動作》を表し同時に客体との関係では《変化》を表すとする論にもとづいて、現代日本語の「既成」の複合動詞、すなわち語彙的な複合動詞を対象に、複合動詞の造語成分となる動詞を（主体／客体の）《動作》《変化》という動詞のアスペクトおよびヴォイスにかかわる語彙的意味の側面から表1のように分類している。

石井（2007）を参照する理由としては、動詞分類の方法が明確でありその精度がある程度担保されると考えられる点が挙げられる。石井（2007）の動詞分類では、表1からもわかるように、各分類においてテイル形やその動詞自体が何を表すかが明示されているほか、巻末に資料1として「既成の複合動詞」造語成分の接続表³（石井 2007:363-409）が付されており、各分類に当てはまる動詞（造語成分）の具体的な情報が豊富であることから、本研究でも同様の方法を採用することで精度の高い動詞分類を実現できると考えた。また、石井

¹ なお、文法的な観点からのアノテーションに関しては、現代日本語の動詞について記述した情報処理振興事業協会による『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (Basic Verbs)』等が先行例として挙げられる。情報処理振興事業協会技術センター（1987）によると、同例では、動詞に対して意味・形態・統語・文法的カテゴリに関する各種情報を付与している。ただし、同例における文法的観点に関する情報は主に各動詞が文中でとり得る形とその形において表す意味とについてであり、あくまで辞書としての機能に主眼をおいたものであると見られることから、本研究の目指すアノテーションとはやや異なる性質をもつと考えている。

² 「中古和文 UniDic」では、動詞「引く」について他動詞であるものと自動詞であるものとを異なる「語彙素」と認定する（『日本語歴史コーパス』では「語彙素細分類」の列に他動詞／自動詞と表示）といったように、一部の語については文法的観点に関する情報が反映されている。

³ 石井氏が調査の対象とした「既成」の複合動詞を構成する造語成分 802 種の分類と、各造語成分が構成する複合動詞とが、結合位置の分布（「前項動詞」「両項動詞」「後項動詞」）ごとに五十音順で示されている。石井（2007:30-31）によれば、「調査の対象とした「既成」の複合動詞は、現代語の辞書3種（『学研国語大辞典（初版）』『岩波国語辞典（第二版）』『新明解国語辞典（第三版）』）と『国立国語研究所資料集7 動詞・形容詞問題語用例集』の見出し語から、文語・俗語等を除き、また、「突き放す」に対する「突っ放す」のように、前項が音便化して元々の複合動詞と並存しているものや、「しがみ付く」「出しゃばる」のように、前項あるいは後項が（現代語では）自立し得ないものを除いてとりだした2,494語（異なり）である」とのことである。

(2007) では、実際に現代日本語の複合動詞を構成する造語成分の各分類への量的分布が数値として示されていることから、中古語と現代語という差はあるものの、動詞の分布の様相を観察する際に一定の基準として機能することも期待される。

表1 アスペクト・ヴォイスにかかわる語彙的意味にもとづく造語成分の分類(石井 2007:35・表5, 筆者により一部改変)

「～ている」という形をとらないか、とつても「状態」しか表せない	《主体の状態》を表す	「有る」 「居る」…	自	①状態動詞
「～ている」という形で「動作の継続」を表す	《主体の動作》を表す	「歩く」 「踊る」…	自	②主体動作 (自) 動詞
		「言う」 「書く」…	他	③主体動作 (他) 動詞
	《主体の動作》と同時に《客体の変化》をも表す	「上げる」 「集まる」…	他	④主体動作 客体変化動詞
「～ている」という形で「変化の結果の継続」を表す	《主体の変化》を表す	「固まる」 「崩れる」…	自	⑤主体変化動詞
	《主体の変化》が伴う 《主体の動作》を表す	「着る」 「かぶる」…	他 (再帰)	⑥再帰動詞

3. 方法

3.1 中古語動詞の収集

まず、分類情報を付与する対象となる、中古語の動詞の収集手順について説明する。今回は、『日本語歴史コーパス』(Ver.2024.03)のデータに準拠した語彙表である、国立国語研究所通時コーパスプロジェクト・小木曾(2024)『『日本語歴史コーパス』統合語彙表』をもとに中古語の動詞を収集した。はじめに、国立国語研究所通時コーパスプロジェクト・小木曾(2024)のうち、奈良時代編から江戸時代編までのすべての語彙についての「短単位⁴」の表である「CHJ-LEX_SUW_2024.3_premodern.csv」を使用して、品詞が「動詞-一般」あるいは「動詞-非自立可能」で、かつ時代が「2 平安」に該当するものを抽出した。その後、抽出したデータを「語彙素 ID」で整理し、1,933語の品詞が動詞である語(「語彙素」)を得た。なお、「動詞-一般」と「動詞-非自立可能」とについて、「動詞-非自立可能」は主に「す」「来」「聞こゆ」といった補助動詞としても使われる可能性がある動詞を示し、「動詞-一般」はこれに当てはまらない動詞を示すというように区別されるが(国立国語研究所コーパス開発

⁴ 国立国語研究所コーパス開発センター(池上尚)(編)(2016)では、短単位について、言語の形態的側面に着目して規定した言語単位で、現代語において意味を持つ最小の単位(最小単位)を短単位認定規程にもとづいて結合させる(又は結合させない)ことにより認定されるものとして、『日本語歴史コーパス』「平安時代編」においては、最小単位について、現代語との関連を重視して、原則として現代語を対象とした最小単位認定規程を適用したうえで、最小単位の種類ごとに定められた短単位認定規則にもとづいて短単位を認定していると説明している。短単位認定規則の詳細については、同文献を参照願いたい。

センター（池上尚）（編）2016）、本研究では補助動詞としての使用可能性の有無は措いて動詞全般に分類情報の対応づけを行うために、これらをまとめて扱った。また、時代が「2 平安」に該当する語彙には、『日本語歴史コーパス』の「平安時代編 I 仮名文学」に収録された平安時代の仮名文学作品 16 作品および「和歌集編」に収録された八代集と称される勅撰和歌集 8 作品において見られる語彙と、「平安時代編 II 訓点資料」に収録された西大寺本『金光明最勝王経』平安初期点の巻一の訓読文において見られる語彙とが含まれるが、両者において見られる語彙も存在するため、今回は後者にのみ見られる語彙には「漢文訓読語」といった注を示しつつ、すべての語彙を総合的にアノテーションの対象とした。

3.2 中古語動詞へのアノテーション

上記のようにして収集した 1,933 語の動詞に、石井（2007）に沿ってアスペクトおよびヴォイスにかかわる分類情報を対応づけた。具体的な方法としては、『日本国語大辞典』第 2 版において立項がある 1,903 語については、主としてその項目を参照して自他や語釈を確認するとともに、現代語への継承が見られる場合には石井（2007）でどのように分類されているかを確認し、用例も踏まえつつ、①状態動詞・②主体動作自動詞・③主体動作他動詞・④主体動作客体変化動詞・⑤主体変化動詞・⑥再帰動詞の中で適当であると考えられる分類の情報を付与した。また、立項がない 30 語については、「中納言」を使用して『日本語歴史コーパス』で当該語の「平安時代編」における用例を検索し、「平安時代編 I 仮名文学」の出典である『新編日本古典文学全集』での注釈や現代語訳等も参照しながら同様に分類を行った⁵。これらの過程において、『日本語歴史コーパス』の「平安時代編」において付与された「語彙素」と『日本国語大辞典』第 2 版で立項されている見出し語との間で表記等に差異がある場合には、用例や語釈をもとに対応する語を判断した。

さらに、石井（2007）では自他両用の動詞や複数の分類に含まれ得る動詞をそれぞれの分類に算入し、重複を許して集計していることから、(1) の例⁶のように自他両用とされる動詞については、基本的に自動詞用法の場合と他動詞用法の場合とで 2 つの分類に算入した。ただし、『日本語歴史コーパス』の「平安時代編」において一方の用法しか見られず、『日本国語大辞典』第 2 版でももう一方の用法の中古以前の用例が見られない場合には、用例が見られる用法のみについて分類した。また、(2) の例のように自他両用の動詞ではないもののその用法が複数の分類に含まれると考えられる動詞も、複数の分類に算入した。

(1) 「吹く」

いかがしけむ、疾き風吹きて、世界暗がりて、船を吹きもて歩く。

（竹取物語；20-竹取 0900_00001, 92000・92130）

1 つめの「吹く」は「風がおこる」という自動詞

→石井（2007）で「吹く（自）」は② →②に分類

⁵『日本古典対照分類語彙表』では「意味の解釈は基本的に『日本国語大辞典』（第二版）により、『岩波古語辞典』を参照した箇所もある」（宮島 2014:11）とされるため、本研究もこれに倣いたいと考えている。

⁶ 用例の引用に当たっては、『新編日本古典文学全集』（小学館）の本文を引用し、出典情報として資料名ならびに『日本語歴史コーパス』におけるサンプル ID および開始位置を示した。引用部の下線は筆者による。

2つめの「吹く」は「風が当たって物を動かす」という他動詞
 →石井(2007)で「吹く(他)」は③ →③に分類

(2) 「驚く」

a. 夜もうらもなううち臥して寝入りたるほどに、門たたくに驚かれて、あやしと思ふほどに、ふと開けてければ、(蜻蛉日記; 20-蜻蛉 0974_00009, 11200)

「驚く」は「目覚める」意 →⑤に分類

b. 夢あはする者来たるに、異人の上にて問はずれば、うべもなく、「いかなる人の見たるぞ」と驚きて、「みかどをわがままに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」とぞ言ふ。(蜻蛉日記; 20-蜻蛉 0974_00009, 29740)

「驚く」は「びっくりする」意 →②に分類

以上のような作業の手順を模式図として示すと、図1のようになる。



図1 中古語の動詞へのアスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報のアノテーションの手順

3.3 データ構築の進捗状況

現在、1,933 語の動詞すべてに一通り分類情報の対応づけを終え、分類の妥当性の見直しと要確認語の取り扱いの検討とを行っている。要確認語と認められる語は 21 語であり、内訳としては、「斯かり (<斯く有り)」「然り (<然有り)」「てふ (<といふ)」等の動詞とそれに接続する他の要素とが縮約して 1 語化したと見られる 7 語、補助動詞的な用法のみと見られる「交ふ (カウ)」「止す (サス)」「しらがふ」「しろふ」「過す (ソス)」「初む (ソム)」の 6 語、孤例であったり不審語とされたりして議論がある 5 語、「中古和文 UniDic」での語彙素認定に不審が見られる 3 語が含まれる。縮約による 1 語化と見られる語や補助動詞的な用例のみの語、議論がある語については、それぞれの性質や用例数を踏まえてデータ上での取り扱いを検討するが、現時点では漢文訓読語と同様に注を示しつつデータとしては保持しておくことを考えている。また、『日本語歴史コーパス』での語彙素認定に不審が見られる (3)・(4)・(5) の 3 語については、以下に示す理由により構築するデータには含めない方向性で検討を進めている。

- (3) 「さく」(語彙素 ID : 345441)
…「中納言」を用いて『日本語歴史コーパス』内を語彙素「さく」で検索したが、当該語彙素の用例なし
→この語をデータから除外
- (4) 「つく」(語彙素 ID : 24536)
…「中納言」を用いて『日本語歴史コーパス』内を語彙素「つく」で検索すると、平安時代まででは「和歌集編」に収録された『古今和歌集』仮名序の用例のみが見つかる⁷
→「平安時代編 I 仮名文学」に収録された『古今和歌集』では当該用例を「付く」(語彙素 ID : 24534) と認定するため、当該用例については認定の誤りであり、当該の語彙素「つく」に該当する用例は平安時代までには見られないと考えて、この語をデータから除外
- (5) 「認む」(語彙素 : 認める、語彙素 ID : 36659)
…「中納言」を用いて『日本語歴史コーパス』内を語彙素読み「ミトメル」で検索すると、平安時代まででは『枕草子』において言葉の乱れについて述べた以下の用例のみが見つかる⁸
「もとむ」といふ事を「みとむ」などはみな言ふめり
(枕草子 ; 20-枕草 1001_00186, 4930)
→語彙素「認める」に該当する用例は平安時代までには見られないといえるため、この語をデータから除外

⁷ その他の 2,096 件はいずれも鎌倉時代以降の用例であるが、「鎌倉時代編」で 9 件、「室町時代編」で 10 件、「江戸時代編」で 80 件、「明治・大正時代編」で 1,997 件と、主に江戸時代から明治時代以降にかけて見られる。

⁸ その他の 2,897 件はいずれも江戸時代以降の用例である。

また、実際にアノテーションを行ったデータの一部を表 2 として示し、対応づけがどのようになされているかを概観する。表 2 は、全データを「語彙素読み」に従って五十音順に並べ替えた際の上から 20 件までのデータである⁹。

表 2 中古語の動詞に対するアスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報のアノテーション（「語彙素読み」の五十音順で上から 20 件まで）

語彙素 ID	語彙素	語彙素読み	語形	アスペクト・ヴォイス分類情報
249356	あいしらう	アイシラウ	アイシラウ	②主体動作自動詞 [†]
155	愛する	アイスル	アイス	③主体動作他動詞 [†]
214479	あいだれる	アイダレル	アイダル	⑤主体変化動詞 [†]
241	会う	アウ	アウ	⑤主体変化動詞
242	合う	アウ	アウ	⑤主体変化動詞
41944	喘ぐ	アエグ	アエグ	②主体動作自動詞 [†]
214996	あえしらう	アエシラウ	アエシラウ	②主体動作自動詞 [†] ・ ③主体動作他動詞 [†]
140696	敢える	アエル	アウ	②主体動作自動詞 [†]
219881	肖える	アエル	アユ	⑤主体変化動詞 [†]
242937	零える	アエル	アユ	⑤主体変化動詞 [†]
319785	合える	アエル	アウ	④主体動作客体変化動詞 [†] ・ ⑤主体変化動詞 [†]
276	仰ぐ	アオグ	アオグ	②主体動作自動詞 [†] ・ ③主体動作他動詞
277	扇ぐ	アオグ	アオグ	②主体動作自動詞 [†] ・ ③主体動作他動詞 [†]
42551	蒼む	アオム	アオム	⑤主体変化動詞 [†]
328	明かす	アカス	アカス	④主体動作客体変化動詞
145586	頒つ	アカツ	アカツ	④主体動作客体変化動詞 [†]
186720	赤む	アカム	アカム	⑤主体変化動詞 [†]
46505	赤める	アカメル	アカム	⑥再帰動詞 [†]
368	崇める	アガメル	アガム	③主体動作他動詞 [†]
358	明かる	アカル	アカル	⑤主体変化動詞 [†]

⁹『日本語歴史コーパス』「平安時代編」および「中古和文 UniDic」の短単位認定規程は現代語の短単位認定規程を基礎とするものであり、新規の語の「中古和文 UniDic」への登録時の注意点として「新規に登録する動詞・形容詞の「語彙素」は、現代語形とする。現代では使用されないような語も、以下の規則に従って現代語形化し、それを語彙素とする。」(国立国語研究所コーパス開発センター(池上尚)(編)2016:123)とあるように、すべての動詞の「語彙素」は現代語形で登録されているため、その読みの五十音順になっていることに注意が必要である。表 2 でも「語彙素」や「語彙素読み」、「語形」は現代語に準じた仮名遣いで表示されている。

分類に際しては、前節で述べたように対象の動詞の現代語への継承が見られる場合には石井（2007）でどのように分類されているかを確認したうえで分類を決定したが、現代語に継承されていなかったり継承されているが石井氏の調査した複合動詞の中に造語成分として含まれていなかったりと石井（2007）でその分類が示されていない場合や、中古と現代で用法に違いがあり石井（2007）の分類をそのまま適用することはできない場合に、筆者が本研究において独自に分類を付与したものについて、分類の末尾に「†」の記号を付け、石井（2007）での分類を採用したものと区別した。現時点では、表2のような形式でデータを Excel ファイルにまとめ、「語彙素 ID」や「語彙素」、分類の情報等で並べ替えや検索による絞り込みを行える状態にしている。

4. 中古語の動詞の様相の分析事例

アノテーションを行った中古語の動詞 1,933 語から要確認語 21 語を除いた 1,912 語を対象に、各分類に当てはまる動詞の頻度を集計すると表3のようになった。なお、表3においては、現代語に継承されていて石井（2007）でその分類が示されており、それに沿って分類を行った動詞の群を A、筆者が本研究において独自に分類を付与した動詞（表2の「アスペクト・ヴォイス分類情報」において「†」を付した動詞）の群を B として区別した。

表3 アスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報にもとづく中古語の動詞の分布（異なり語数、単位：語）

	① 状態動詞	② 主体動作 自動詞	③ 主体動作 他動詞	④ 主体動作 客体変化 動詞	⑤ 主体変化 動詞	⑥ 再帰動詞	計
A	2 (1)	60 (11)	187 (26)	138 (9)	196 (19)	32 (2)	615 (68)
B	21 (12)	191 (49)	296 (38)	296 (43)	582 (81)	67 (17)	1,453 (240)
計	23 (13)	251 (60)	483 (64)	434 (52)	778 (100)	99 (19)	2,068 (308)
頻度 (%)	1.11	12.14	23.36	20.99	37.62	4.79	100.01

表3において、丸括弧内の値は、総数のうち複数の分類に重複して算入している動詞の数を示す。今回は、2つの分類に算入した動詞が計148語、3つの分類に算入した動詞が計4語あったため、丸括弧内の値の総計は $148 \times 2 + 4 \times 3 = 308$ より 308 となっている。なお、 $2068 - (148 + 4 \times 2) = 1912$ より、集計の対象とした動詞 1,912 語をすべて分類できていることがわかる。また、頻度の計算に当たっては小数第三位以下を四捨五入したため、合計値に誤差が生じている（以下の表4・表5も同様）。

集計結果から、中古語の動詞の分布の様相としては、⑤主体変化動詞が4割弱を占めてもっとも多く、次いで③主体動作他動詞や④主体動作客体変化動詞が2割程度、②主体動作自動詞が1割強であり、⑥再帰動詞と①状態動詞は1割にも満たない少なさであることがわかる。この結果は、表4に示す、現代日本語において複合動詞の造語成分となる動詞の分布の様相と大勢では矛盾しないと考えられる。

表4 現代日本語において複合動詞の造語成分となる動詞の分布（石井 2007:36・表6を参照して筆者が作成；異なり語数、単位：語）

	① 状態動詞	② 主体動作 自動詞	③ 主体動作 他動詞	④ 主体動作 客体変化 動詞	⑤ 主体変化 動詞	⑥ 再帰動詞	計
計	2	84	242	187	246	41	802
頻度(%)	0.25	10.47	30.17	23.32	30.67	5.11	99.99

表3と表4の集計結果を比較すると、頻度の割合には違いがあるものの、⑤主体変化動詞がもっとも多く、③主体動作他動詞がそれに続き、④主体動作客体変化動詞も一定数は見られ、以下は②主体動作自動詞、⑥再帰動詞、①状態動詞の順に徐々に少なくなっていくというように、類似した分布が見られる。頻度の割合に違いが生じた原因としては、表3が中古語の動詞全体について集計したものであるのに対して表4が現代日本語の動詞全体ではなく複合動詞の造語成分となる動詞について集計したものであることや、中古語において主体の状態を表す動詞で①状態動詞に分類するか⑤主体変化動詞に分類するか判断に悩むものが少なからず存在したことが考えられる¹⁰。後者に関しては、分類の妥当性を見直しを進めることである程度解消される可能性がある。

さらに、石井(2007)における現代語での分類に沿って分類を行った動詞の群(表3におけるA)と、筆者が本研究において独自に分類を付与した動詞の群(表3におけるB)とを分けて集計すると、表5のようになった。

表5 分類付与方法が異なる動詞群ごとに見るアスペクト・ヴォイスにかかわる分類情報にもとづく中古語の動詞の分布（異なり語数、単位：語）

	① 状態動詞	② 主体動作 自動詞	③ 主体動作 他動詞	④ 主体動作 客体変化 動詞	⑤ 主体変化 動詞	⑥ 再帰動詞	計
A	2 (1)	60 (11)	187 (26)	138 (9)	196 (19)	32 (2)	615 (68)
頻度 (%)	0.33	9.76	30.40	22.44	31.87	5.20	100.00
B	21 (12)	191 (49)	296 (38)	296 (43)	582 (81)	67 (17)	1,453 (240)
頻度 (%)	1.45	13.15	20.37	20.37	40.06	4.61	100.01

¹⁰「浅ふ」「稚^{いは}く」「おほどく」等が挙げられる。石井(2007)では、「似る」「生きる」などは「～ている」という形はとるが「状態」しか表せないという理由で「状態動詞」とされるが、複合動詞の造語成分としては、基本的に「運動動詞」としてはたらいており、ここでは「主体変化動詞」や「主体動作動詞」に分類した(石井 2007:52・注4)とされていることから、複合動詞の造語成分ではなく単独の語としてこうした動詞をどのように捉えるべきかという点も含めて、分類を検討する必要がある。

表5を見ると、Aでは⑤主体変化動詞と③主体動作他動詞がそれぞれ全体の3割程度を占め、④主体動作客体変化動詞がこれらに次いで全体の2割強を占めているのに対して、Bでは⑤主体変化動詞だけが全体の4割程度を占め、③主体動作他動詞は④主体動作客体変化動詞とともにそれぞれ全体の2割程度を占めるにとどまるといったように、AとBとで分布の様相に違いが見られる。また、Aの分布の様相は表4で示された現代日本語において複合動詞の造語成分となる動詞の分布とほとんど一致している一方で、Bの分布の様相はこれらとかなり異なるものとなっている。こうした結果からは、中古語の動詞の内でも現代語への継承が見られる動詞の群とそうでない動詞の群、あるいは現代語への継承が見られてかつ複合動詞の造語成分になり得る動詞の群とそうでない動詞の群とが何らかの点で違った性質をもつことが示唆される。

以上のように、動詞の分布の様相には一定の傾向性があることが推察されるため、ある環境でこうした傾向性と大きく異なる動詞の分布の様相が観察された場合、その環境に動詞の分布の傾向を変化させる要因を想定することができると考えられる。

5. おわりに

本稿では、中古語の動詞に対して、石井(2007)を参考に、アスペクトおよびヴォイスにかかわる分類情報を対応づける試みについて述べた。また、現時点で構築済みのデータを用いた中古語の動詞の分布の様相に関する分析の事例を提示し、動詞の分布の様相には一定の傾向が見られる可能性を指摘した。今後は、データの構築を完成させるとともに、構築したデータを活用した研究にも取り組みたい。

なお、「狂ふ」等の一部の動詞については、中古語の用例があるにもかかわらず、『日本語歴史コーパス』に収録された作品の中に当該用例をもつものが含まれないために、今回のデータには反映されていない。データの整備を進め、こうした語についても等しく扱う方法を検討するとともに、『日本語歴史コーパス』のいっそうの拡充も望みたいと考えている¹¹。

文 献

- 石井正彦(2007)『現代日本語の複合語形成論』、ひつじ書房。
奥田靖雄(1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大学国語国文』8, pp.51-63, 宮城教育大学国語国文学会。
奥田靖雄(1978a)「アスペクトの研究をめぐって(上)」教育科学研究会・国語部会(編)『教育国語』53, pp.33-44, 麦書房。
奥田靖雄(1978b)「アスペクトの研究をめぐって(下)」教育科学研究会・国語部会(編)『教育国語』54, pp.14-27, 麦書房。
国立国語研究所(編)(2004)『分類語彙表—増補改訂版』、大日本図書。
国立国語研究所コーパス開発センター(池上尚)(編)(2016)『『日本語歴史コーパス平安時代編』形態論情報規程集』、国立国語研究所コーパス開発センター、

¹¹ 辞書や索引語を用いて未反映の語を追記することが必要になると考えられるが、形態素解析器「MeCab」(Ver.0.996)と解析用辞書「中古和文UniDic」(Ver.202203)とを用いて形態素解析を行うと「狂ふ」を含む用例も問題なく解析されるため、別の方法で「中古和文UniDic」に含まれる中古語の動詞を網羅的に収集することができれば、より精緻なデータが構築できるという予測が成り立つ。

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/doc/morph-heian-2016.pdf> (2025年8月16日確認).

情報処理振興事業協会技術センター(1987)『計算機用日本語基本動詞辞書 IPAL (Basic Verbs) 一解説編一』, 情報処理振興事業協会技術センター,

https://www2.ninjal.ac.jp/dictionaries/IPALBV/IPALBV_manual.pdf (2025年8月16日確認).

宮島達夫(2014)「古典語の統計と意味」宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(編)『日本古典対照分類語彙表』別冊, pp.3-15, 笠間書院.

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉(編)(2014)『日本古典対照分類語彙表』, 笠間書院.

資料

片桐洋一(校注・訳)(1994)「竹取物語」片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子(校注・訳)『新編日本古典文学全集 12 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』, pp.11-106, 小学館.

木村正中・伊牟田経久(校注・訳)(1995)「蜻蛉日記」菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久(校注・訳)『新編日本古典文学全集 13 土佐日記・蜻蛉日記』, pp.81-436, 小学館.

国立国語研究所(2025)『日本語歴史コーパス』(Ver.2025.03, 中納言 Ver.2.7.2),

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2025年8月16日確認).

国立国語研究所通時コーパスプロジェクト・小木曾智信(2024)『『日本語歴史コーパス』統合語彙表(バージョン 2024.03)』, 国立国語研究所, <https://doi.org/10.15084/0002000263> (2025年8月16日確認).

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部(編)(2000-2002)『日本国語大辞典』第2版, 小学館.

松尾聰・永井和子(校注・訳)(1997)『新編日本古典文学全集 18 枕草子』, 小学館.

関連 URL

コーパス検索アプリケーション「中納言」(Ver.2.7.2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

形態素解析器「MeCab」(Ver.0.996)

<https://taku910.github.io/mecab/>

解析用辞書「中古和文 UniDic」(Ver.202203)

<https://clrd.ninjal.ac.jp/unidic/>